

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

勤勉な家事の系譜：マンゲルからアイロンへ (私のスケッチ・ブック (26))

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森, 明子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00005909

勤勉な家事の系譜

——マンゲルからアイロンへ——

国立民族博物館 助教授
森 明子

■マンゲルとは？

マンゲルという名におぼえのある方は、あまりないと思う。ドイツ語の辞書には、「洗濯物などの 艶出しローラー」(三省堂『クラウン独和辞典』)とある。実際のところは、アイロンが普及する前に、後のアイロンの機能を担っていた器械である。

この実物を、博物館で私は何度か目にし、またドイツ語の説明文も読んだのだが、どうしてもその使用風景を想像できないでいた。最近、マンゲルをじっくり観察する機会を得て、ようやく納得するに至ったので、ここではマンゲルについて記そうと思う。

さて、マンゲルがどうにも理解しにくいのはなぜかという、それがアイロンと似てもつかぬ大仰な物体であるからだ。それが、あの小さなアイロンと結びつかないのである。

■アイロンかけは楽しいか？

アイロンとは、片手におさまる小型の器械で、洗濯後の繊維のしわをのばす。

しわを伸ばす理由は、衣服を身に着けたときにきれいにみえるからだ——。幼少時から身につけた私のアイロンについての理解は、このようなものである。

アイロンのかかった衣類を身につけるのは気持ちがいい。だが、アイロンかけは私にとって、あまり楽しい仕事ではない。理由は、手間がかかるからというよりも、アイロンかけという営みに、おもしろみを見出せないからである。

アイロンかけで、アイロンの先端や底辺の角を駆使して、衣類の細部のしわをのばすのは、それなりに面白い。だが、それを畳むところから、つまらなくなる。新たなしわをつくることになるし、畳んでしまっているあいだに、パリッとした感触が失われていくのもつまらない。私にとっては、アイロンをかけた衣類を、その熱がこもっているうちに身に着けるのが、理想の状況といえる。

だが、ドイツやオーストリアの人々がアイロンをかける目的は、どうも私のとは異なるようだということがわかった。すべての人がそうだというわけではないが、アイロンかけをよくする人は、

すべての衣類にきちんとアイロンがかかっている状態を、あるべき姿だと考えているようだ。

見落とせないのは、着ているものにアイロンがかかっていることより、タンスの中の衣類が、折り目正しく、角を合わせて垂直に積まれている状態を重視していることである。そのような衣類の保存状態を維持するために、アイロンかけは、必須の工程なのである。

■洗濯物の美的価値

人が「重要」と思うものの尺度には、まったく異なるふたつの種類があると思う。ひとつは、現状を維持するうえで必要不可欠という意味で、重要なものである。美的価値は問われない。排泄行為や衛生という考え方は、この種の重要さを示す好例だろう。

もうひとつの重要さの尺度は、美的価値である。この価値のために、人は多くの代償（労力）を支払う。かけた代償や労力が大きいほど、いっそう価値は高まるし、逆に、あまりに手軽に入手できるものの価値は低い。

では、アイロンかけは、このどちらの尺度でとらえられているだろうか。

私は、アイロンかけを、前者の尺度でとらえていた。アイロンがかけてあるかどうかよりも、着用する衣類がどのような状態であるかということが問題である。この視点から見ると、アイロンかけは、これがなくてはたちゆかぬというほどのものではなく、したがって、重要度はかなり落ちる。

だが、ドイツやオーストリアの主婦は、

後者の尺度でアイロンかけをとらえているらしいことが、私に見えてきた。彼女たちにとって、美しくアイロンのかかった衣類が積み上げであることは、より多くの手間がかかっていることを示しており、それを使用するのは別の意味がある。

家のなかをこのように整えておくことは、勤勉な主婦の美德のひとつである。当然のことながら、その美德は、アイロンが普及するずっと以前からあった。そして、アイロン以前の時代のその仕事を担ったのが、マンゲルかけという大仰な、それゆえ手間もいっそうかかる工程だったのである。

■マンゲルの使い方

さて、マンゲルには大型のものと小型のものがある。大型のものだと、6畳くらいの広さの部屋がほとんどいっぱいになってしまう。重量となると想像もつかない。

大型のものを、どのように使うか、かんたんに述べよう。この器械は別名ヴェッシュェロレ Wäscherolle（洗濯ロール）ともいう。その名の示すとおり、洗濯物をロール状ロレにして使用する。木製のロールRolle（パン生地つくりを使うめん棒の大型のものと考えればよい）とロール用布ロルトゥーフ Rolltuchを使用する。

まず、台の上で、洗って乾いた洗濯物をロール用布の上に平らに並べる。これをロール用布とも木製ロールに巻きつけていく。ロール用布は、洗濯物を守るもので、丈夫な麻製で清潔に保たれている（写真1参照）。



写真1 最初に洗濯物をロール用布の上に並べて、ロールに巻きつけていく



写真2 ロールを可動部分の下に入れる

ロールを芯にして巻き上がったものを、マンゲルの箱状の可動部分の下に入れた後、ハンドルを回して可動部分を移動させていく。これによって下にあるロールは、上から大きな力を受けながら回転していく（写真2、3参照）。

可動部分は常にふたつのロールの上で移動するしくみである。一方の端まで移動すると、それまで重力を受けていたふたつのロールのうちのひとつが姿を現す。反対の端に移動すると、もうひとつのロールが姿を現す。

数回往復したのちに、ロールの一方を取って、台の上で広げ、仕上がった洗濯物を取り出す。そのロールに、別の洗濯物を同じように巻きつけ、可動部分の下に入れる。

ふたつのロールを交互に取り出し、そこに巻きつける洗濯物を次々にとりかえていくことによって、作業は進行する。

ひとつのロールに大きいものなら1点、小さなものならロール布の長さに応じて数点を巻きつけることができる。

仕上がった洗濯物は、ひとつひとつ畳んで、洗濯籠に収めていく。すべての洗濯物が、籠のなかに収められたとき、マンゲルかけが終了する。

■東ベルリン1950年代

最後に、このようなマンゲルが、洗濯という工程の中に、どのように位置づけられていたのか、見ていきたい。ここでは、1950年代から60年代にかけての東ベルリンの例をとりあげる。

当時の都市の集合住宅で、洗濯は共用の洗濯室でおこなわれていた。建物は1階から4階までが住宅で、5階に共用の洗濯室があった。洗濯室をいつ使うかは、住人同士であらかじめ予約して決めておいた。



写真3 ハンドルを回して可動部分を移動させ、下にあるローラーを回転させる

洗濯前夜から、汚れ物を水につけておいて、翌朝、まず洗濯鍋を沸かした。燃料は石炭や木材で、各自が中庭から5階まで運んだ。洗濯物を洗濯鍋で煮た後、洗濯板でこすった。それから、濯ぎ、脱水へと進む。脱水は、ローラーにかけるか、手で絞った。洗濯物を干す場所は、集合住宅の屋根裏で、ここも共用である。屋根裏の干し場に洗濯物をかけるところまでが、一日の仕事である。このあと洗濯物が乾くまで、冬なら数日以上かかった。

乾いた洗濯物を、最後にマンゲルにかける。マンゲルはドラッグ・ストアにあって、これもあらかじめ予約しておいた。予約した日に洗濯物を持参し、使用料金を払って、自分でマンゲルを操作した。マンゲルをかけてきれいに畳んだ衣類を自宅に持ち帰り、それをタンスにしまうところで、洗濯は完了した。

1回の洗濯に、約1週間を要した。洗濯は、月に1回する程度で、現在のように頻繁に洗濯することはできなかったし、現在のように衣類を頻繁に替えていたわけでもなかった。

■洗濯という大仕事

洗濯物のしわをのばすために、上に述べたような巨大な器械が発明され、また、その大型の器械の周辺で、歩き、かがみ、移動する身体運動が繰り返されてきたことに、私は単純に感心する。

この過程が、のちに、アイロンかけに代わったのである。現在の「アイロンかけ」という行為を、このような文脈において見直してみよう。

「洗い立ての洗濯物の肌触り」に、私はいまでもこだわりたいと思っているが、そのような洗濯のあり方が許されない状況において、ヨーロッパのアイロン文化とでもいうべきものが発達した、と考えることができる。

そこでは、手間がかかることに、じつは意味がある。かんたんにできてしまっただけでは、その意味が減ってしまうような、家事のひとつの姿があらわれてくる。

こんなふうなアイロンかけの背景に、その繊維をつくり、使いこなしてきた人々の生活に思いを馳せるのも素敵なことだと思う。